



# よりあってつむぐ 発達をゆたかに

乳幼児期から終末期まで

第2回 出会い

乳幼児期の健診と親子教室で

ほしの しょうこ  
星野 祥子

宇治市他非常勤発達相談  
員・兵庫大学非常勤講師

私は、現在、京都府の自治体で乳幼児健診や乳幼児期の発達相談、親子教室、保育園や幼稚園への訪問をしています。以前、岐阜県高山市で児童発達支援事業所に勤めて、ここでも、1歳半健診後の親子教室を行っていました。

京都発達研究会では、発達相談部門で保育園での発達相談を担当しています。私は、私たちと保護者やお子さんとの出会いのきっかけとなる時期に仕事をしています。今回は、親子に最初に出会うことの多い乳幼児前期健診と幼児期のフォロー教室である親子教室での発達相談員としての私の役割を紹介いたします。また、そこで受けることが多い相談を取り上げ、発達相談員の立場から考えているこ

とを書きたいと思います。

## 赤ちゃんとの楽しい時間を 乳幼児前期健診を中心に

現在、「母子保健法」のなかで、市町村が実施しなくてはならない健診は、1歳8か月児健診と3歳児健診と規定されており、そのほかに「必要に応じ、妊産婦又は乳児若しくは幼児に対して、健康診査を行う」ということが規定されています。私が関わっている自治体では、幼児期の2つの健診に加えて、3か月児健診と10か月児健診を行っています。3か月児健診では、小児科医の診察と身体計測に加えて、保健師による身体の観察を行っています。そのほか、発達相談員や栄養士もスタッフに入っています。各専門職が役割分担をしながら、保護者の方の必要に応じた相談をできるようになっています。

初めての健診では、「健診に来たらなにか指摘されるのではないか」という不安をもって来られる方もいるのではないかと思います。たしかに、健診では、疾患の発見や運動機能、精神発達の遅延等の障害の発見が目的となっています。しかし、保護者にとって、「健診は指摘されること、」というだけではなく、「相談してみたら安心できた」と思っ



てもらえるような相談ができるように心がけています。

この時期は、これまでの眠っていることからの生活から、人や周りのものに自分から興味を示すようになってきます。身体運動面でも、うつ伏せができるようになってきたり、寝返りをしようとするなど、大きな変化の時期です。そのため、この健診では、「赤ちゃんがどうやって遊んだらよいのか?」といった、赤ちゃんとの遊び方について相談を受けることが多いです。

この時期の赤ちゃんは、おもちゃを手に取りたくて手を伸ばす、お母さんが見たいから寝返りをしようとする、などモノや人への意欲が身体を動かす意欲につながっていきます。そのため、身体の動かし方と合わせて、おもちゃを見せると目を輝かせるか、おもちゃを目で追うか、おもちゃに対して手を伸ばそうとし始めているか、というような大人がおもちゃを使って遊んだ時の反応や、声の出し方などの様子を見ます。各家庭の様子をお聞きしながら、「それぞれの家庭のなかで赤ちゃんに関わるのが楽しいな」と思っ過ぎておこせるヒントをお伝えするようにしています。

最近、乳幼児後半の頃に「この子、一人で遊んでいることが多いんです。あんまり自分を求めてこないの、そういう子なのかな」と思っ「というお話をされるお母さんに出会うことが続きました。乳幼児後半の時期は「大人ーモノー子ども」の三項関係が形成され、大人を介しながらモノやコトを共有することが楽しくなり、外界との関わり方が大きく変化する時期です。しかし、赤ちゃんによっては、モノへは向かうけれど、そのモノを大人と共有すべく自ら大人に向けて働きかける力が弱く、そのまま過剰している」と一人で遊びを楽しんでいるように見えることがあ